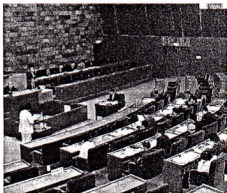


# 検証 県議会

(上)

# 質問

# 議論之しく演説多し



予算委員会。代表・一般質問とは違って質問の回数制限がなく、一問一答方式が採用されている。「より突っ込んだ議論ができるように」との狙いからだ—県議会本会議場で

2月21日午前の県議会本会議場。同僚議員から激励の拍手を受けながら、自民党県連政調会長の斎藤万祐議員(88)が代表質問をするため、議長席前の演壇に登った。

質問ではなく要請だった。持ち時間80分のうち約10分を残りして質問を終えた。

## ●シナリオ

県議会は内部の申し合わせで、異議の答弁を受けた後の再質問、さらに再度の答弁後の再々質問までを設けている。しかし、この機会を最大限に使う議員は少ない。

今回の2月県議会の代表質問

と一般質問で質問したのは16議員。県議会事務局によると、最初の質問(要請)だけの場合は除くだけで終えたのは、いずれも自民党の川名寛重(81)、田中家隆(83)、山中操(86)、伊藤勲(86)の4議員。逆に、再々質問までしたのは代表質問に立った民主党の田中道行議員(69)だけだったという。

県議会は本来、異が提案する議案を慎重に審査し、疑問点があれば鋭く追及する場だ。北海道夕張市が財政再建団体に指定されたのを受け、行政の監視役としての議会の責務があらためて重視されている。

「(県議からは)すべてのシナリオを(代表・一般質問の)事前に出してもらっていることが多いです。」

昨年8月の補選で初当選した

07

# 統一地方選

# 「県民の関心」映す鏡

民主党の軍司俊紀議員(41)は今回が初の一般質問だった。それを終えた後、県職員にそう言われて驚いた。

多くの議員が県議会で読み上げる原稿を事前に県側に提出し、引き換えに異が答える答弁内容を事前に開示してもらおう。これに基づき再質問の原稿も事前に県側に示しているというのだ。

自らは印西市議時代、質問の詳細までは市側に伝えず、手元にもメモを用意して臨んだという。「これでは儀礼的だ」

## ●勉強不足

地元の県道整備の進捗状況と今般の県選進をたずねる議員もいた。本会議場でなくても、県議が県の担当部、課長に聞けばすぐに分かる内容だった。同僚の若手議員がさき首をかしげた。

しばしば県議を傍聴すると、というNPO法人代表の女性(56)は「鋭い突っ込みが少なく、演説して終わっているケースが多い。十分に政策論争しているとは思えない。だから、県議会が県民から遠い存在になっている」と、勉強不足ぶりを批判する。

議論が乏しい静かな議会は、情報格差に乏しい。議論が増えれば、県民の関心は集まるはずだ、と指摘する。

東国英英夫高崎県知事は、初めて臨んだ県議会で、事前のすりあわせなしで、議員と論戦を交わした。議員に近い傍聴人は驚きを隠しなかった。

同知事はその中で「生き生きとした議論がなされるべきだ」として、質疑応答を「一問一答方式」に切り替えてはどうかと議会側に投げかけた。

高城、栃木、京都など7府県議会では一問一答方式が導入されている(06年9月現在)。テーマごとに議論を深めやすい方式とされる。

千葉の場合、予算委員会にこの方式を採り入れる。だが、代表・一般質問は、議員が全質問をしてから、知事らがまとめて答える。「一括質問方式」を探っている。

統一地方選の前半選挙にあたる県議選の告示(30日)が約3週間後に迫ってきた(政令指定市・千葉市議選も同日程)。約49.5万人の有権者が票を投じる。直前の2月定例県議会で、選挙を意欲した質問、行動も目についた。この4年、県民が託したい思いは議員を通じて確実に届いていたのか。県議会を厳査する。